

2021年1月17日 礼拝説教要旨

詩編講解説教44「魂は塵に伏し」

詩編44：20～27、ローマ8：35～39

第44編は民の嘆きの詩編に分類されます。「民」というのは言うまでもなくイスラエルのことを指しておりますが、多くの注解書がこの嘆きの詩の背景にはバビロニア捕囚があると指摘しております。カルヴァンでさえここはダビデを離れて、バビロニア捕囚や紀元前2世紀中頃のシリアによるユダヤの支配の時代に触れています。何れにしてもイスラエルにとって国の存亡の危機がこの詩編の背景にあるということは確かなことであろうと思います。例えば10～17節など捕囚の厳しい現実を表現していると読み取ることができるでしょう。

通常、このような試練を経験しますと、神さまを否定し信仰を失いかねないと思われるかもしれませんが、実際、試練によって信仰を捨てることは珍しくないのです。自分をこのような目に遭わせる神さまはもう信じられない。それで終わりです。でもそういう信仰というのはどこまでも自分本位なのであって、信仰の主体が常に自分の側にある。信じる信じないを決定するのは自分であると考えているところに起こります。しかしこの詩編を歌う詩人たちはそもそも信仰をそのようには捉えておりません。自分ではない。全ては神さまなのです。神さまの中で自分の人生を捉えていく。そうなりますと、例えばヨブのような「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」（ヨブ2：10）というように、人生に起こる幸不幸も全て神さまの中にあるという姿勢を作ります。これは例えば『ハイデルベルク信仰問答』でも、「神の創造と摂理を知ることによって、わたしたちはどのような益を受けますか。答 わたしたちが逆境においては忍耐強く、順境においては感謝し、将来については、わたしたちの真実な父なる神をかたく信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる、ということです」（問28）と告白します。わたしたちの順境とか逆境とかは関係ない。どのような状況であれ、神さまの中にこの人生があることは変わりないという信仰がそこにあります。わたしたちもこれまでの自分本位の信仰のあり方を見直して、詩編からそういう本物の信仰を体得したいのです。イスラエルが亡国の危機にあっても、それでも神さまに迫り、寄り縋り、神さまを信頼し続ける。わたしたちもその信仰に生きたいと思うのです。

この詩人は落ちるところまで落ちたと理解してよいでしょう。「山犬の住みか」（20節）というのは、廢墟を意味する言葉です。捕囚によって街が廢墟と化す。そこには死があるのみです。

「死の陰」というのは、詩編23編「死の陰の谷を行くときも」を思い起こさせますが、全く光のない暗闇のこと、希望のない状態です。人生の途中でわたしたちもまたそういう死の陰に覆われ、光が見えないという経験をするのです。このコロナ禍もそうかもしれません。出口の見えない長いトンネルの中にいるような感覚を覚えている人は少なくありません。個々の生活においても様々な悲しみや痛みを経験します。それは神さまを信じる信じないに関わらず、必ず人生において起こるのです。

そのことがここに明らかにされます。「このような我らが、我らの神の御名を忘れ去り、異教の神に向かって手を広げるようなことがあれば、神はなお、それを探り出されます。心に隠していることを神は必ず知られます」（21、22節）この詩人はそういう異教の神に向かって祈るようなことはしていないと、身の潔白を表明しています。そのように自分は神さまに信頼して

歩んできたのに、今、自分はどうなっているか。「我らはあなたゆえに、絶えることなく殺される者となり、屠るための羊と見なされています」(23節)「屠るための羊」とありますが、それはただ死を待つのみ存在ということ。そういう状態にまで陥ったということです。そしてその決定的な言葉が26節です。「我らの魂は塵に伏し、腹は地に着いたままです」魂というのはネフェシュ、その人の最も根本的な部分のことです。そこが塵に伏している。「塵にすぎないお前は塵に返る」(創世記3:19)という御言葉を思い起こします。御前に罪を犯した人間はそういう定めにあるのです。

そういう現実を受け止めた上で、この詩人はそれでも神さまに助けを求めています。「主よ、奮い立ってください。なぜ、眠っておられるのですか。永久に我らを突き放しておくことなく、目覚めてください」(24節)ここには揺るぎない信頼があります。しかしこれは詩人の強い信仰なのではありません。冒頭に申しましたように神さまはもう前提であって、こういう試練があるから神さまを信じないという考え方はこの詩人には最初からないのです。人生に起こる逆境もまた神さまの変わらないご支配の中にある。現実がいかに厳しくても、自分が神の民である事実は変わらない。だからこそ苦難の中でも神さまを呼び、助けを求め、「なぜ眠っておられるのか」と大胆に神さまに迫ることができるのです。

そしてこの変わらない神さまのご支配こそ、神さまの慈しみです。「立ち上がって、我らをお助けください。我らを贖い、あなたの慈しみを表してください」(27節)ここに「慈しみ」(ヘセド)が出てきました。「慈しみ」とは神さまの変わらない救いの契約を表しています。人間がどういう状況にあっても神さまは一度人間と結ばれた救いの約束を勝手に反故にしたり、無効にすることはしない。わたしたちの苦難や逆境が契約の終了を意味しているのではないということです。なぜそういうことが言えるのか。その苦難の中にも神さまは入って来られたからです。神さまご自身が「屠られる小羊」となられ、塵に伏した魂を担われた。そこは神さまから見放されたところではない。その落ちるまで落ちたところも神さまのおられるところ、いやむしろ神さまを最も近く感じる場所としてくださった。そのことがキリストによって明らかにされました。そういう意味でこの詩編もキリストを見据えていると考えてよいでしょう。

今日はロマ書8:35以下を読みました。ここでパウロはこの詩編44編23節を引用します。それは当時の教会が迫害の中でも、神さまの救いの約束を見失わずに信仰に踏みとどまるためです。迫害の中で、神さまはわたしたちを見放されたと考えるのではなく、その苦しみの中でこそ神さまを特別に近く感じることができるようになるためです。そのためにキリストは来られ、ご自身が魂を塵に伏せるようにして十字架で死んでくださいました。屠られる小羊とられたのです。それゆえに人生に起こる試練もまた最も神さまを近くに感じる時となります。

今の状況は確かに厳しいのです。でも順境にあるとき以上にわたしたちは神さまを近くに感じることができるのではないのでしょうか。試練のときこそキリストの十字架がはっきりと見えてくるのです。そして神さまの変わらない恵みの中にあることを信じることもできるのです。この信仰によってイスラエルも教会も困難に耐えてきました。今、わたしたちはそういう信仰の時を過ごしています。今こそ信仰に踏みとどまることができるように祈りましょう。